幸にして此の計畫は彼の病によつて畫餅に歸し、乾坤一擲の大活劇は終に幕を開くの機會を失つたのであつた。

八　帖木兒の人物

古來大事業を成就した人々には、どこかに常人と異つた所がある。かゝる立場から帖木兒の特に他人に傑出して居つた點を求めると、既に人も論じて居る樣に、堅忍不拔の精神と出精止むことを知らざる熱心との二つを擧げることが出來ると思ふ。其の一度思ひ定めたことは、如何なる障碍に出逢つても貫き通さねば措かない氣象は、後世の學者が認めて居るばかりではなく、彼の事業を親しく見聞したアリもその『戰勝記』に明記して居ることである。「凡そ一度企てたことには自分の全力を傾注し、必らず終局の目的を達しなければ之を止めなかつた」とは、彼自身記して子孫に殘して居る訓言の一つである。勿論かゝる主義精神は、彼の事業を成功せしむるには大なる原因を成したものには違ないが、しかしまた一方では、極端に此の精神を發揮して、爲めにあまり感心しない結果に陷つて居ることもある。曾てケライと云ふ民族を討つた時に、その討伐を委ねられた大將が、戰勝の後に平和を締結したが、後に帖木兒はそのことを知つて、飽く迄初志を貫くが爲に、亂暴にも約束を無視して自身またもや討伐したことがあつた。即ち此の性質の爲に殘酷といふ樣な譏りを買ふ場合を作つたことも少くないのである。また彼の出精であつたといふことも有名なことで、これはその歴史を一讀すれば何人も直ちに看取する處である。例へばかの壯麗な都サマルカンドに、彼が生涯の間果してどれ丈けの安逸の時間を貪つたかを考がへて見ても、之を了解することが出來る。實に一年間とまとまつて此處に居つたことは稀で、東西の經略に遑なく、偶々都に入つても、